

なむくしゃら信平どん

寺村輝夫

絵 梅田俊作



なむくしゃら信平どん

寺村輝夫

絵 梅田俊作



913

寺 村 輝 夫

なむくしゃら信平どん

講談社 1976

253p 22cm

(児童文学創作シリーズ)

てらむら てるお

なむくしゃら信平どん

昭和51年6月28日 第1刷

昭和51年 第3刷 (K)

著 者 てらむら てるお 寺村輝夫

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号112

電話 東京03(945)1111(大代表)

振替 東京8-3930

製 版 株式会社 まゆら美研

印刷所 豊国オフセット株式会社

双美印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

© 寺村輝夫 1976 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

定価は箱に表示してあります。

(児一)

も
く
じ



白しろいつぶ土つちお白しろどん……………6

にぎりめしとわらじ……………20

青あお白しろい光ひかりの玉たまがでた……………34

うらない行者ぎやうじや信平しんぺいどん……………47

でてきた刀かたなとおかつ……………59

むこどんになつて……………73

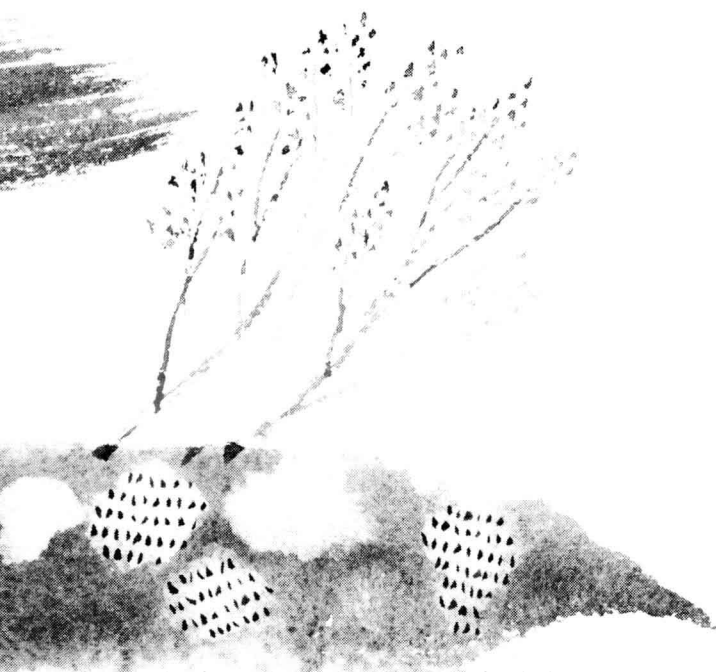
いいことははやくする……………84

まずとのさまのうらない……………97

てきをあざむくことば……………111

名主なぬし山崎やまざき信平しんぺい生まれる……………124

たからの石いしは白しろいつぶ石……………137



いくさがせまってくる……………150

ねんぐのかわりに石を……………163

それで……稲荷大明神……………177

もうひとつ金ぐらがたつ……………190

信平どんのさむらいすがた……………204

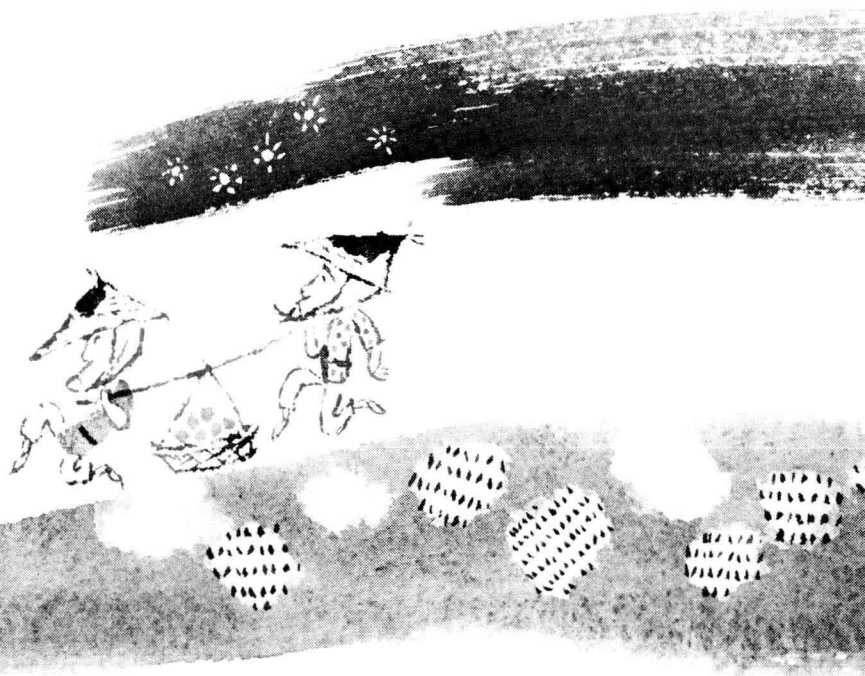
だますな家老木部銀蔵……………217

つみのないけものまで……………228

ひやくしようとのさまだぞ……………240

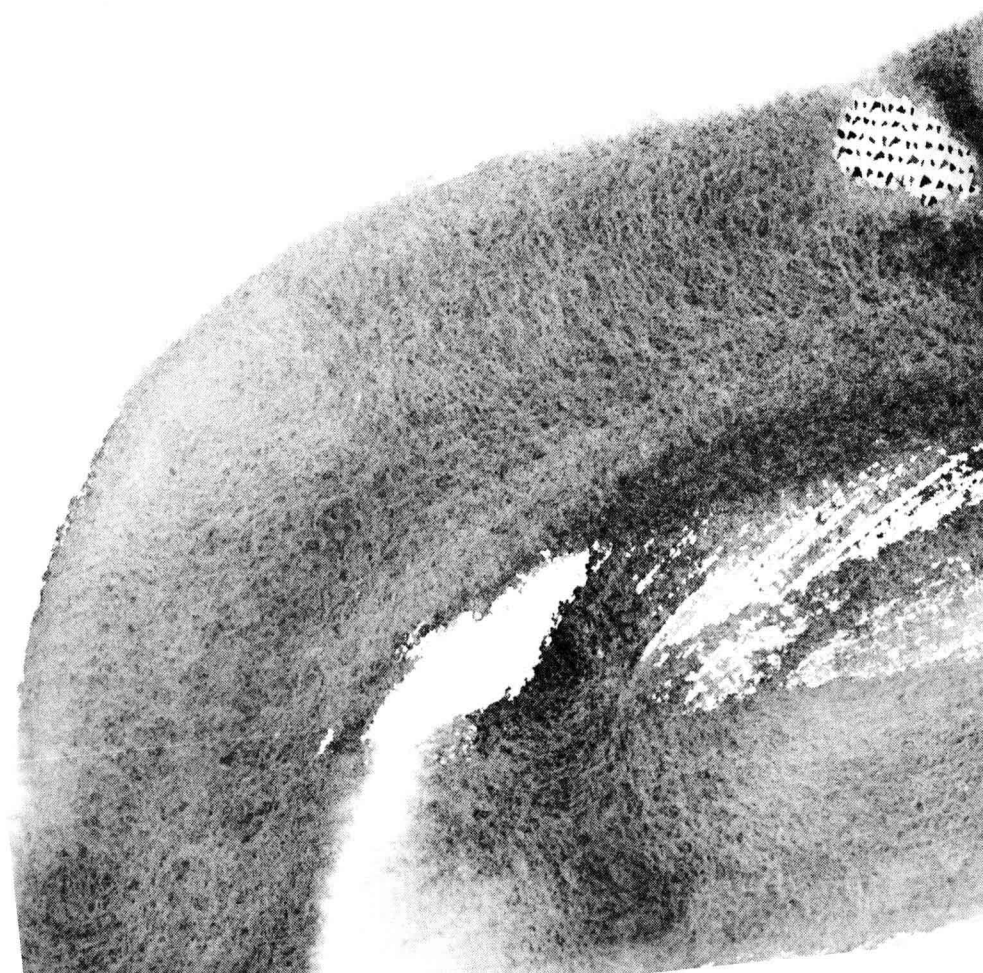
あとがき……………252

著者紹介……………254



なみけのうた





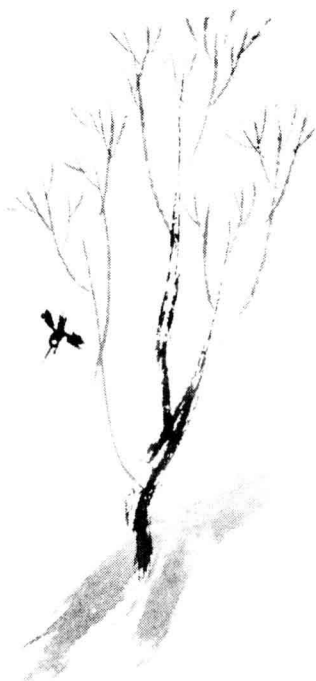
白いつぶ土お白どん

むかし、早場村に、信平どんという、わかものがいきました。

早場村は、山おくでした。

四方から山がせまって、すりばちのそこのようなところに、早場村がありました。

早場村の人たちは、もう、何年も、いや何十年も、村の外へでたことがありませんでした。三つ、四つ山ごえをすれば、となり村があるはずでした。もう一つこえれば、赤松城というお城があつて、そこにとのさまがいるはずでした。早場村は、そのとのさま高浜なんとかいう人のご領地でした。が、あまり山おくなので、



お役人やくにんもこないし、ねんぐ（いまの税金のようなもの）をおさめろともいつてきませんでした。
そのはずです。早場村はやばむらでは、米こめなどほんのひとにぎりしかとれません。山は
だの、だんだんばたけに、ひえだの、そばだの、まめやいもをつくって、くら
していました。

ことに、信平しんぺいどんの家のまわりは、土つちというより岩いわばかりでした。その岩を
くずしてはたけにするのですが、どういうわけか、しおのような白しろいつぶので
る土つちで、ひえもいもも、やっとそだつだけでした。

「けものたたりじゃ。」

早場はやばの親方おやかた源兵衛げんべえどんがいました。わずか二十けんばかりの村むらです。名主なぬし
どんもいません。いちばん年としよりを親方おやかたとよんで、親方おやかたが村むらをとりしきってい
るのです。

けものたたり——。

そうです。早場はやばの山には、くまができました。きつねやむじながあばれました。

村の人たちのくらしは、けものとのたたかいでした。さくもつはあらされる、外にできればかされる、ばかされなければおそわれる……。

信平どんのごせんぞが、むかし、けもののかわをはいで、それをよその村へ売りにいった、それをうらんで、たたるのだそうです。もちろん、ほんとうかうそかわかりません。が、信平どんはしんじました。だって、じぶんの家のはただけが、白いつぶ土で、ろくにいもできないのです。

それで、信平どん、けものをだいじにしました。ことに、白ぎつねには、「お白どん。」

といって、けっしてわるさをしませんでした。けがをしている白ぎつねを、じぶんの子どものように、かいほうしたこともあります。白ぎつねも、それから、よそからいもをとってきてくれたり、川のさかなをとって、もってくるようになった。

雪がふると、早場村は白くうずまりました。

さて、雪どけのおわるころ、北の山にわらびとりに行った、信平どんのおやじどんが、くまに食われました。

信平どんは、たったひとりになりました。そのとき十八さい。かかどんは、五さいのころ、なだれにまかれてしんでいました。

村人たちは、口々にいうのです。

「やはり、あの家は、けものがたたってるんじや。」

そして、親方の源兵衛どんは、

「やい信平。くやしかったら、くまをうて。かなしかったら、かたきをとれ。」
が、信平どんは、ただなかだけでした。

「この、いくじなしめが。それでも男かつ。」
いわれると、

「子もちのくまに、ちかづいたおやじどんがわるいんじや。」

そうなのです。子もちのくまは、気がたかぶっています。ちかよったり、に

げなかったりすれば、子がおそわれるとおもいます。それでおそうのです。

信平しんぺいどんは、そんなわかもでした。

その秋あき。早場はやばのいもばたけが、けものにあらされました。

「やられたっ。」

いのししのしわざでした。五平ごへいどんのいもばたけが、すっかりほりおこされていました。

村むらのしゅうは、ししがりをはじめました。

「信平しんぺい。おまえもこいや。」

だが、信平しんぺいどんは、こしをあげません。

「ししをころしちやいかん。かわいそうじゃ。おらは、夜よるも見はって、はたけをまもる。ししがりはやらん。」

「かってにしろ。」

そのばん、早場村はやばむらには、ししなべの、うまそうなにおいが、よどむように、た

だよいました。しかし、だれもが、信平どんに声をかけませんでした。

「あのよわむしは、早場のはじじや。」

「信平のこしぬけめ。あいつのはたけがやられても、たすけちゃやらんぞ。」

あくる日は、田助どんのはたけが、やられました。

みんなは、たいこを鳴らし、木ぎれをたたいて、いのししをおいつめました。

また二、三日して、源兵衛どんのはたけが、こんどはむじなにやられました。つぎつぎと、けものにおそわれる早場村でしたが、たたりのあるはずの、信

平どんのはたけだけは、手をつけれません。

いや、やられたのです。

ある夜、信平どんが見まわりしていると、いもをほっているものがいました。

それは、五平と、よめどんのサノでした。

信平どんはがっかりしました。

「いってくれれば、わけてやるのに……。」

そのとき、信平しんぺいどんは、村むらをでることにきめました。

「人が、人のはたけをあらすようじゃ、おしまいじゃ。」

山をいくつもこえて、お城しろがあるという町まちまでいけば、なんとかなるべ。

朝あさになりました。

朝あさといつても、谷たにそこまで日がさすには、かなりまたねばなりません。昼ひるち

かくならないと、おてんとさまがおがめないのです。

信平しんぺいどんは、旅たびじたくをしました。

しかし、べんとうをつくらうにも、米こめひとつぶ、いもひときれもありません。

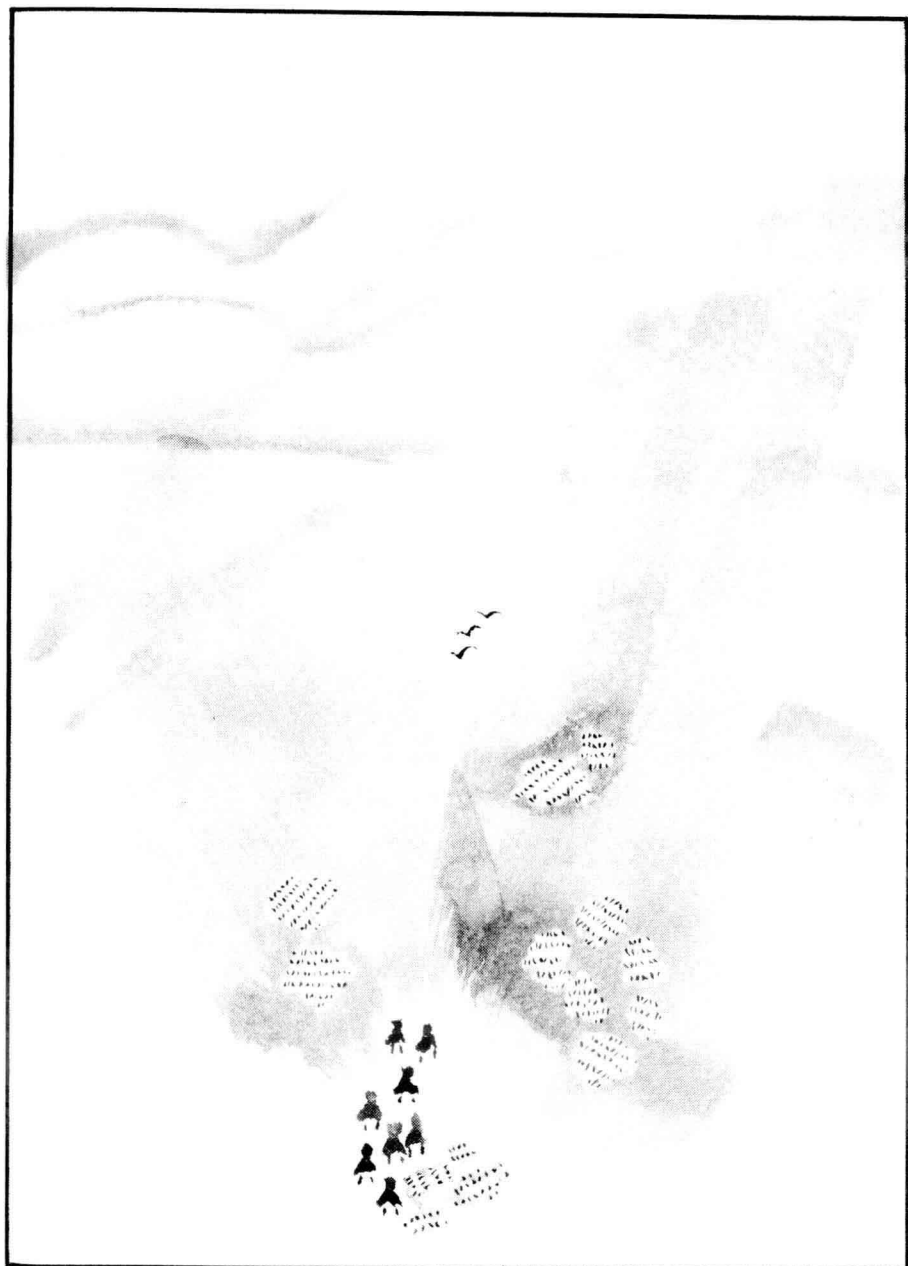
あるのは、たきぎのたばと、わらがひとにぎり。

「なんにもたねえよりいいわい。」

信平しんぺいどんは、わらを一ひとたばもって、村むらをでました。

ひと山こえると、もう夕方ゆうがたでした。

木の実みをかじり、きのこを食たべて、そこにねむることにしました。でも、そ



んなあぶないことつたらないのです。くまがいる山です。おおかみがおそいかる山です。

「どうなったって、いいわい。おらがしんだって、かなしむものもいやしない。」
信平しんぺいどんはへいきでねむろうとしました。

すると、夜よるの山道やまみちに、ろんろんと、小さな火ひがうごくのです。まるで、信平しんぺいどんをよんでゐるみたいでした。

信平しんぺいどんは、火ひをめあてに、あるきだしました。

そして、夜よるのうちに、もうひと山こえていたのです。

あたりがうすらあかるくなつたとき、火ひがきえました。

信平しんぺいどんは、このときになって、やっと氣きがつきました。

「あれは、きつね火ひだ。もしかすると、きつねにたたられて、とんでもないところにつれてこられたかもしれんぞ。」

信平しんぺいどんは、火ひのきえたあたりを、さがしてみました。